

D-2

丁寧語の類型論 Typology of addressee honorifics

山田 彬亮 Akitaka Yamada¹

¹ 大阪大学大学院 人文学研究科 言語文化学専攻

Abstract. This paper is a typological study of addressee-honorific markers (or, honorific allocutivity, i.e., morphemes attached to (auxiliary) verbs expressing the speaker's respect for the addressee). Based on the findings in the recent literature, this paper proposes typological parameters that are expected to facilitate our understanding of cross-linguistic variations among addressee honorific markers: (i) morphological realization, (ii) syntactic positions, (iii) competition, (iv) the target of respect, (v) historical origins, (vi) interaction with other grammatical expressions, and (vii) the degree of respect.

Keywords: honorification • addressee-honorific expressions • allocutivity • typology

Submitted Aug 19 2023; Accepted Sep 14 2023; Presented Nov 11 2023

1. はじめに

本稿は、丁寧語（すなわち、聞き手に対する話し手の敬意が表現された（助）動詞につく形態素）にどのような通言語的バリエーションが存在するのかを扱う類型論的研究である。

丁寧語の類型論的広がりを持った研究には Yamada (2023b) が存在するが、丁寧語に割かれた紙幅が多くはないこと、原稿が書かれた 2020 年以降に研究成果が次々と報告されたこと、記述の対象が形態論に関わる現象に限定されていたことなどから、丁寧語の類型論的な広がりには十全に論じられたとは言い難い。そこで、本稿では近年の研究動向を踏まえ、より詳しい類型論的なパラメータを提案する。

2. 先行研究：丁寧語研究の広がり

丁寧語は、国語学／日本語学の伝統では、敬語体系のシステムの一部として記述・研究が積み重ねられてきた(菊地 1994)。そして宮地 (1980、他) の研究に代表されるように、その歴史的な素描については緻密な文献研究から多くのことが分かっている。

一方で、丁寧語は単に敬語表現としてだけ研究が進められてきたわけではない。一般言語学の理論との関連で、丁寧語は、これまで大きく二回、研究史上の転換点を経験している。第一は、文法化／間主観化表現としての丁寧語研究の発展である。1990 年代以降、歴史的発展の過程が詳細にわかっていた日本語の丁寧語は、

歴史言語学、機能主義言語学、認知言語学の分野で、文法化／間主観化の事例として脚光を浴び、理論の発展に大きな貢献を果たしていくこととなる (Dasher 1995; Traugott and Dasher 2002; 大堀 2005; Yamaguchi 2015; 小川他 2020)。

第二は、2010 年代に始まった丁寧語を allocutivity 表現として見なす研究の興隆である。端緒となったのは宮川の一連の研究で (Miyagawa 2012; 2017; 2022)、この流れに触発される形で、日本語 (Yamada 2019c) や韓国語 (Portner et al. 2019; An 2023)、琉球諸語 (重野 2010; アントノフ 2016) といった東アジアの言語だけでなく、バスク語 (Oyharçabal 1993; Haddican 2018; Alok and Haddican 2022)、パンジャブ語 (Kaur 2017; 2020a; b; Kaur and Yamada 2022)、タミル語 (McFadden 2020)、マガヒ語 (Alok 2020; 2021; Alok and Baker 2022)、バジカ語 (Kashyap 2012) といった非東アジア言語での記述や理論化が大きく進展し、丁寧語の類型論研究の基盤が整ってきた。

このように、通言語的／一般言語学的な研究環境が大きく成長しつつある丁寧語研究ではあるが、一方でこのような研究成果は日本の研究者には、あまり認知されておらず、Shibatani (1998)、Hasegawa (2017)、荻野 (2022) といった敬語に関するハンドブックの中でも、日本語・韓国語以外の敬語に関する言及は少ない。また、allocutivity の通言語的な研究には Antonov (2013; 2015) や Driemel and Murugesan (2023) が挙げられるが、敬意以外の二人称指向表現への記述は充実している一方で、丁寧語に関しては主に日本語・韓国語に限られて、非東アジア言語に関する詳細な比較はあまり行われていない。

そこで、本稿では、Yamada (2023b) の研究を発展させつつ、日本語以外の丁寧語に関する近年の丁寧語研

* 本研究は日本学術振興会 科学研究費助成事業 基盤研究 (C) 2022 年 4 月 - 2027 年 3 月「コーパス言語学と実験言語学の統合：敬語の確率的構文交替を事例に (代表:山田彬亮)」(#20K21957) の支援を受けたものである。とりわけ韓国語の事例については金賢真氏、Young-Hoon Kim 氏、Eunsun Jou 氏から有益なコメントを頂いた。この場を借りて感謝を申し上げる。もちろん、本稿の全ての誤りは著者に帰するものである。
責任著者。E-mail: a.yamada.hmt@osaka-u.ac.jp

究の成果を整理しながら、これらの丁寧語のバリエーションを捉えるための七つの通言語的な視点を提案し、丁寧語研究の類型論的な礎を構築する。

3. 丁寧語の類型論

3.1 視点1：形態的な表出の仕方

丁寧語の形態統語的な表出には複数のタイプがある。第一は、丁寧語に特化した独立した形態素が存在するケースである。例えば、日本語の「ます」は丁寧語としての機能以外を持たず、独立した形態素である。第二は、丁寧語が他の意味機能と融合して表現されるタイプである。韓国語の *supnita / eyo* (丁寧語とフォーマリティ、文のモード; Portner et al. 2019) やタイ語の *khráp* (聞き手のジェンダー; Yamada 2019c)、マガヒ語 (丁寧語と尊敬語)、そして日本語の「です」(丁寧語とコピーラ) などがある。

3.2 視点2：統語的な表出の仕方

丁寧語などの聞き手目当ての表現は、文の周辺部に位置するという一般的な傾向がある (cf., Performative Hypothesis, Ross 1969; 間主観化理論, Traugott and Dasher 2002)。だが、丁寧語の統語的な表出位置には、言語間で大きなバリエーションがある。

(位置1) 文の最周辺部. 文の最周辺部に分布する丁寧語には、(1) のタイ語 (Yamada 2019c) の他、韓国語 (Portner et al. 2019) などが知られている。このような最周辺部に位置する丁寧語は、埋め込み節の中に生起できないという特徴がある (= (2))。

(1) *lian yêe løy lō khráp?*
study problematic PP Q AH.M
「彼女は勉強がそんなにできないのですか？」

(2) **Sakol bòk [waaa khw maa khráp] khráp.*
Sakol say that he come AH.M AH.M
「サコルは彼が来ますと言います」(intended)

(位置2) 文のやや周辺部. 文の最周辺部ではないが、テンスよりは外側に位置する丁寧語も知られている。先の事例とは異なり埋め込み節の中にも生起が可能なものが多い。例えば、(3) に示すパンジャープ語 (Kanpur, Lahore, Gujrat 地方の方言) のデータからは、丁寧語 *je* が、疑問のマーカ *kii* よりも左に生起し、また、埋め込みも可能であることが見て取れる (Kaur 2017; Kaur and Yamada 2019; 2022)。

(3) a. *karan aayaa je kii?*
Karan.NOM come.PRF.M.SG AH Q
「カランは来ましたか？」
b. *karan-ne keyaa [ki raam karan-ERG.PL say.PRF.M.SG that Ram aayaa je].*
come.PRF.M.SG AH
「カランはラムが帰宅しましたことを告げた」

(位置3) 文の中域. 日本語の「ます」は、(助) 動詞と否定辞の間に置かれ、文末からはかなり遠い位置に生起する (例: 走りませんでしたかね)。これは、「ます」がもともと「まゐらす (参る+使役)」という動詞+助動詞の表現から文法化したという歴史的事情を反映するものである (宮地 1980; Yamada 2019c)。この「ます」と似た位置に生起する事例として知られているのが、ミャンマー語の *-pà/-bà* である (Romeo 2008: 80, Okell and Allott 2001: 114, Yamada 2019c: 194)。

(4) *nəme bəlo k^hɔ-pa-θə-lé.*
name how call-AH-REAL-Q
「あなたの名前は何でしょうか？」

(位置4) 複合動詞の中. 最も文末から離れた位置に出てくる丁寧語として知られているのが、下二段活用の「給ふ」であり、これは、イディオムを形成する複合動詞の中に割って生起することも可能である (例: 「思ひ給へ出づ」など。ただし、前接動詞には限りがあり、生産性は低い)。

(位置5) 句の周辺部. 丁寧語には、句の周辺部に分布するものもある。日本語の他 (Yamada 2022a)、韓国語での事例が報告されている (Yun 1993; Choi 2016; 2021; Yim and Dobashi 2016)。

(5) *Inho-ka-yo onul-yo Seoul-eyse-yo*
Inho-NOM-AH today-AH Seoul-in-AH
yenghwa-lul-yo poass-e-yo.
movie-ACC-AH saw-DECL-AH
「インホはですね、今日ですね、ソウルでですね、映画にですね、行きましたよ」(Choi 2021)

※埋め込み節に生起する丁寧語. タイ語や韓国語は文の最周辺部に丁寧語が生起し、それらは埋め込み節の中では非文となるが、それ以外の位置に登場する丁寧語は、埋め込み節の中で使用可能なことが多い。だが、そのような埋め込み用法についても、下記の点で言語間差異が報告されている。第一は、丁寧語がどのような埋め込み節で生起できるかという違いである。パンジャープ語では、埋め込み丁寧語が生起できるのは (i) 発話行為動詞補部で、それが (ii) 定節 (finite clause) の場合に限られる (Kaur and Yamada 2019)。一方、日本語の「ます」はこと節であれば述語の種類に関わらず生起ができ (Yamada 2019c)、マガヒ語でも定節であれば述語に関わらず自由に埋め込みが可能であるなど (Alok 2020: 3.2 節)、言語間の差が報告されている。

第二に、埋め込み節の中に丁寧語が生起した際に、主節での丁寧語の使用が義務的か否かでも違いが存在する。日本語では「花瓶を壊してしまいましたことをお詫び {#する/します}」のように、埋め込み節に丁寧語が生起すると主節での使用が必要となるが、パンジャープ語ではこの限りでない。

第三に、同一言語の中においても埋め込み節に差が

存在する。例えば、日本語の「ます」は多くの節に埋め込みが可能だが (Yamada 2019c: 第 5 章; cf., Tagashira 1973)、「です」は埋め込みへの制約がきつい (Tomioka and Ishii 2022; Yamada 2023c)。

(位置 6) 複数位置 (多重丁寧語構文)。複数の統語的位置に丁寧語が同時に分布する言語も存在する。例えば、中世日本語の「候ふ」は (6) に見るようにモダリティや否定辞の前後に同時に生起する特徴があり、これは「走りませんでした」のように現代日本語にも受け継がれている (Yamada 2019c)。なお、現代日本語では (7) に示すように三度丁寧語を生起させることも可能である (Miyagawa 2022)。

(6) こまかにうけたまはり候ひて、計らひ沙汰し候ふべく候ふ (とはずがたり、1306 年成立)

(7) 走りませんでしたでしょうね。

タミル語でも (8)a に見るように丁寧語の二重化は観察される (McFadden 2020: 410-412)。しかし、(8)b-c のように、日本語とは異なり、一方の位置にしか丁寧語が生起しないパターンも容認される。

- (8) a. niingae saap-t-aaččü-ŋgae[-aa-ŋgae]
you.PL eat-ASP-RES-AH-Q-AH
b. niingae saap-t-aaččü-ŋgae[-aa] ?
you.PL eat-ASP-RES-AH-Q
c. niingae saap-t-aaččü -aa-ŋgae?
you.PL eat-ASP-RES -Q-AH
「あなたは食べましたか？」

3.3 視点 3：共時的な構文の競合

丁寧語の構文には複数の構文が競合するケースが報告されている。とりわけ、注目を集めているのが、上記に示した多重丁寧語構文である。(8) に示したタミル語の諸構文については、二重化したからと言って他の構文と比べて敬意が上昇するわけではないこと、ただしそれ以上の違いについては今後の研究が俟たれるという報告がなされている (McFadden 2020) (ただし、Q-AH の順では、確認を求める話し手の知識にバイアスがある疑問文、AH-Q ではよりニュートラルな情報指向型疑問文になるかもしれないという指摘もある; McFadden 2020: 411)。

日本語の多重丁寧語構文については、通時的/共時的バリエーションの研究がより進んでいる。第一に、歴史的な変化について、(9) のような変化が知られている。江戸期には「ます」しか登場していなかった丁寧語構文が (= (9)a)、明治期にいわゆる be-support を過去接尾辞の左に要求するようになり (= (9)b)、この be-support の要素に丁寧語が表出する表現が現代日本語の規範形となった後 (= (9)c)、「です」のみを文の周辺部に登場させる構文の使用率が上がっている (= (9)d) (田野村 1994; 福島・上原 2003; 尾崎 2004; 落合 2012; 坂野 2012; 川口 2014; 小川他 2020; Yamada 2019b)。なお、類似した

変化は「候ふ」等にも指摘されており (Yamada 2019c)、聞き手目当ての表現が文の周辺部で発話されるようになる、間主観化理論が予測する一般的な言語変化が観察される (Dasher 1995; Traugott and Dasher 2002)。

- (9) a. 走り-mas-nan だ 江戸期
b. 走り-mas-en { kat/ dat} -た 明治期
c. 走り-mas-en { *kat/*dat/desi}-た 現代
d. 走 r -ana {kat/*dat/*desi}-た です 現代

第二に、方言調査からも文末指向性は観察される。「走らんかったです」や「走らんやったです (山口県~九州地方)」「走らんへんかったです (近畿~香川県)」等、文末に「です」を用いる構文への容認度が高いことが知られており、「です」の文末指向性は顕著にうかがえる (山田 2023b)。

また、日本語では 20 世紀の途中までイ形容詞が「です」と使用される「寒いです」のような構文は非文とされ、代わりに「寒うございます」のような構文が使われていた。終助詞や認識的モダリティ-yoo とした文末要素が存在することが新規形式の選択割合を高める働きをしてきたことが知られている (Yamada 2023a; c)。

3.4 視点 4：敬意の対象

素材敬語とは異なり、丁寧語の敬意の対象は、その定義から「聞き手」以外にあり得ない。しかし、その「聞き手」の特定に関して言語間で違いが存在する。

第一は、聞き手特定のタイミング (あるいは定不定の区別) についてである。「聞き手」に敬意を払うためには、当然話し手は「聞き手」を特定しなければならないが、この特定が発話時に起こるかどうかで差が存在する。例えば、チラシやポスターでは話し手 (書き手) は聞き手 (読み手) を特定できない。このような場面でも、日本語では「夏は熱中症のシーズン {だ/です}」のように丁寧形は可能である。一方、パンジャブ語では発話時に聞き手が特定できている必要があり、丁寧語は (10) のようなポスター文では使えない (Kaur and Yamada 2022) :

- (10) Garmii bimaariyāā-daa mausam {e/#je}.
summer diseases-GEN season be.PRS/AH.PL
「夏は熱中症のシーズン {だ/#です}」

日本語の代名詞は丁寧語とは異なるふるまいをする。「あなた」が指す対象が特定できる状況 (例: 対面での会話) で、(11) の文を、目下 (例: 生徒) から目上の人間 (例: 先生) へ使うことはできない (Yamada and Donatelli 2021; Kaur and Yamada 2022)。しかし「あなた」が指す対象が不特定である場合、この社会階層制約は失われる。例えば、(11) が駅などに張られたポスターの宣伝であった場合、たとえ聞き手 (ポスターを閲覧した人) が社会的に地位の高い人であっても、問題は生じない。

- (11) あなたはこの夏休み何をしますか？

第二は、埋め込まれた丁寧語の敬意対象が、主節の聞き手を指すか、埋め込み節の聞き手を指すかという差である。例えば、日本語の「ます」は埋め込み節でも主節における「聞き手」が敬意対象となる（ただし、Blended discourse と呼ばれる状況では敬意がシフトする可能性もある；Yamada 2019c）。パンジャープ語でも、基本的には埋め込まれた丁寧語 (*je*) は、主節の文脈における聞き手への敬意となる。例えば、(12)a では、Karan ではなく、この文の話し手が話している相手に敬意が向けられる。

- (12) a. karan-ne keyaa [ki **miiraa**] kal
Karan-ERG say.PRF that Mira.NOM tomorrow
aayegii **je**]
come.FUT AH
「カランは明日ミラが来ることを伝えました」
- b. karan-ne keyaa [ki **maiN**]
Karan-ERG say.PRF that I.NOM
kal aavaaNga **je**]
tomorrow come.FUT AH
「カランは明日私が来ることを伝えました」

しかし、(12)b のように埋め込み節に一人称代名詞が共起した場合は、埋め込み節における聞き手（つまり、Karan の話の聞き手）に対して敬意が向けられるという読みも可能になる (Kaur and Yamada 2019)。このような事例は一種の指標のシフト (indexical shift) として分析されている。

3.5 視点 5：歴史的なルーツ

語源については不詳のものも多いが、以下のような起源のものが知られている。

第一は、数 (Number) を起源とするものである。タミル語の丁寧語 *ggae* やパンジャープ語の *je* は、これらの言語における一般的な複数形表示と同一の形を有し、数との直接的な繋がりが認められる (McFadden 2017; Kaur 2020c; Kaur and Yamada 2022)。

第二は、敬称の二人称代名詞を起源とするものである。Souletin 方言のバスク語で使われる *zu* は、二人称敬称単数の代名詞 *zu* ‘you’ (Alberdi 1995) と同一の形式を持っている。

第三は、素材敬語が間主観化したものである。日本語がこのタイプに属する。尊敬語由来のものには「ござる (<御座ある)」「おりやる (<お入りある)」「おぢやる (<お出ある)」が、謙譲語由来のものには「侍り」「さうらふ (<さぶらふ)」「ます (<参らす)」などが知られている (金水 2005; Yamada 2019c)。なお「参らす/ます」に関しては、謙譲語として使われていた際には尊敬語の前で発音されていたが、丁寧語として使われるようになり尊敬語の後ろで発音されるようになり、間主観化に伴い生起位置の通時的な変化が生じたことも知られている (宮地 1980; Yamada 2019c: 168ff.)。

3.6 視点 6：相互作用

(相互作用 1) 二人称主語。タミル語、パンジャープ語、マガヒ語などでは、二人称主語が述部と一致を起した時、丁寧語は発音されてはならないという規則がある。下記のタミル語の例を比較されたい。

- (13) a. **niingæ** saap-t-aach-aa-**ggæ**?
you.PL eat-ASP-RES-Q-AH
「もうあなたは食べていますか？」
- b. ***niingæ** saap-t-**iingæ**[-aa-**ggæ**?
you.PL eat-PST-2PL-Q-AH
「もうあなたは食べましたか？」

(13)a は、結果分詞 (RES) が用いられた完了の文である。この言語では分詞は主語との一致を持たない。よって、丁寧語が生起できる。一方で、(13)b は過去形が用いられた文であり、主語と述語の一致が存在する。すると、丁寧語は付けられず、(13)b は非文となる (McFadden 2020: 404)。

バスク語では、主語でも目的語でも述部と一致を起した二人称表現が文中に存在するとき丁寧語を用いることはできないというより一般的な規則がある (Oyharçabal 1993)。これらの事例は「**Kinyalolo** の一般化」の一種として解釈され、聞き手目当ての表現である丁寧語と二人称代名詞の関係を議論する上で有益なデータとして注目されている。

一方で、日本語などでは「あなたは何を召し上がっていますか」のように尊敬語を伴った敬称の二人称主語と丁寧語の共起は可能であり、これは丁寧語の示す聞き手への敬意と敬称二人称代名詞の示す聞き手への敬意が異なる性質のものであることと関係があるのではないかと議論されている (Kaur and Yamada 2022)。例えば、「あなた」は他者に対する敬意であるが、目上の者には使うことができず、この点で丁寧語と大きく異なる。また、同一文において、パンジャープ語等では二人称代名詞と丁寧語の敬意に不一致が起こってはいけないのに対し、日本語ではこれが可能であることもこの仮説を支持するものとして考えられている (ibid.)。

(相互作用 2) 三人称主語。標準日本語の謙譲語では、その指示対象が主語の指示対象より目上でなければならぬという規則があるが（「{#社長/私の弟} が部長をお助けした」(菊地 1994; Ikawa 2022)、標準日本語の丁寧語には聞き手が主語の指示対象より目上/目下でなければならないという制約はない。

一方で、奄美大島浦方言では、主語の指示対象への敬意が聞き手への敬意より高い場合、文は非文となり (= (14))、丁寧語と主語の間に明確な相互作用が観察されている (重野 2010: 13)。

- (14) {*sensee/wutuutu}-ja gakkō-ccji ?ik-jor-i.
teacher/younger brother-TOP school-to go-AH-PRS
「{*先生/弟} は学校へ行きます」

(相互作用 3) 発話行為表現. 命令文や疑問文などの文のモードも丁寧語と相互作用を示すことが知られている。第一に、日本語の疑問節を作る助詞「か」は、丁寧語がないと情報指向型 (information-seeking) の主節疑問文を作れないという制約がある (= (15)a) (Miyagawa 2017; Yamada 2019c)。一方で、「の」は丁寧語がなくても共起は可能だが、むしろ「ます」と共起した場合、役割語 (例: お嬢様言葉) としてのニュアンスを持ってしまうという点で、「か」とは対照的である (= (15)b)。

- (15) a. { *走る/走ります } か?
b. { 走る/?走ります } の?

第二に、現代の日本語では、丁寧語はそれそのままでは命令文に生起できない (例: *走りませ)。同様に、パンジャブ語でも丁寧語は命令文のモードマーカと共起ができない (= (16))。

- (16) kitaab parheyaa(*-o) je
book read-IMP.2PL AH.PL
「本を読んでください!」 (Kaur 2020b: 5)

だが、日本語では一部の尊敬語が生起することで使用が可能になる (例: お走りなさいませ)。尊敬語自体も命令文と強い相互作用を持つことから (Yamada 2019a; 2022b)、発話行為の割り当てをめぐる敬語とモードに複雑な関係があることが見て取れる。

(相互作用 3) 削除との相互作用. 削除 (または分析によっては null pronoun) も丁寧語との相互作用を示す (山田 2023a; Maeda et al. 2023)。 (17) から、B の応答文として、エコー返答文なら「ます」が使われること、ただし、動詞部分を削除すると「です」が使われるようになることが分かる。一方で、(18) に見るように、韓国語では「ですよ」に対応する構文を作ることができず、言語間での差が観察される。

- (17) A: 太郎は 走ったかなあ。
B: { 走りましたよ/*ましたよ/ですよ }。

- (18) A: Taro-nun tali-ess-ul-ka?
Taro-TOP run-PST-GUESS-Q
「太郎は 走ったかなあ」
a. B: tali-ess-supni-ta.
run-PST-AH-DECL
「走りましたよ」
b. B: *{supni/i-pni}-ta.
AH/COP-AH-DECL
「ですよ」 (intended)

3.7 視点 7: 敬意の度合い

丁寧語の表す敬意が、ありかなしかという二段階である言語 (例: パンジャブ語、韓国語) と、三段階で表現される言語 (例: バスク語の一部の方言、日本語、マガヒ語) が知られている。三段階の敬意を持つ言語の間でもどのような形態的手段で表現されるのかによって次の二つの類型が認められる。第一に、シタグラマ

ティックな方式で敬意の高さを調整する言語がある。日本語の「ます」がこれに当たり「ござる/致す/申す」という「ます」とは独立した形態素が付加されることで敬意が向上する (Ikawa and Yamada 2022; Oshima to appear)。

第二に、パラディグマティックな方式を用いる言語もある。バスク語には、方言によっては、先述の *zu* だけでなく、*zu* の口蓋化によって生じたとされる *xu* という形態も可能である (Alberdi 1995: 286)。丁寧語に限らず *z* が *x* で表される音になると指小辞を形成することができ (*zezen* 「雄牛」、*xexen* 「小さい雄牛」)、丁寧な *zu* と非丁寧形の間レベルの敬意を表す中間的な敬意が *xu* によって表現される。

マガヒ語も Non-honorific、Honorific、High-Honorific の三段階の敬意を持つが、これに加えて聞き手への敬意を表示させない形式も可能である (Alok 2020: 87)。敬意の表示が随意的である点も日本語などとは異なると言えるだろう。

4. まとめと将来研究への示唆

丁寧語研究の中心は、長らく日本語や韓国語であったが、主に南アジアの諸言語での記述・理論化が進展したことで、近年になりようやく個別言語の特徴と類型論的な一般化を分けて議論する下地が整いつつある。本稿では、この近年の成果を基に、丁寧語の類型論的広がり整理する視点を提案した。

今後も新しい言語で丁寧語の研究が進展することは十分あり得る。そのような言語の丁寧語を調べる際、本稿で示された視点からの調査は重要な出発点となることが期待される。また、本稿で提案されたこの七つの視座に、互いに関連性があるのか (何かより根源的な要因から派生してでてくる性質なのか) 等、一般言語理論の視点から丁寧語の性質が議論されることも重要であり、素材敬語や allocutivity に関わるその他の現象 (Yamada 2023b; Wang 2023) と比較・検討を受けながら、より精緻な理論化が進められていくことが、今後の研究に期待される。

参考文献

- Alberdi, Jabier (1995) The development of the Basque system of terms of address and the allocutive conjugation, in Hualde, Jos Ignacio, Joseba A. Lakarra, and R.L. Trask eds. *Towards a History of the Basque Language*, 275–293, Amsterdam: John Benjamins.
Alok, Deepak (2020) Speaker and addressee in natural language: honorificity, indexicality and their interaction in Magahi, Ph.D. dissertation, Rutgers University.
—— (2021) The Morphosyntax of Magahi addressee agreement, *Syntax* 24, 263–296.
Alok, Deepak and Mark Baker (2022) Person and honorifi-

- cation: Features and interactions in Magahi, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–35.
- Alok, Deepak and Bill Haddican (2022) The formal heterogeneity of allocutivity, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–41.
- An, Duk-Ho (2023) Reanalyzing speech style endings in Korean, Presentation at WAFL 17.
- Antonov, Anton (2013) Grammaticalization of allocutivity markers in Japanese and Korean in a crosslinguistic perspective, in Robbeets, Martine and Hubert Cuyckens eds. *Shared grammaticalization, with special focus on the transeurasian languages*, 317–340, Amsterdam: Benjamins.
- (2015) Verbal allocutivity in a crosslinguistic perspective, *Linguistic Typology* 19(1), 55–85.
- Choi, Jaehoon (2016) The discourse particle *-yo* in Korean: its implications for the clausal architecture, *Rivista di Grammatica Generativa* 38, 65–73.
- (2021) Two types of node-sprouting in Distributed Morphology evidence from Korean, BCGL 14.
- Dasher, Richard Byrd (1995) Grammaticalization in the system of Japanese predicate honorifics, Ph.D. dissertation, Stanford University.
- Driemel, Imke and Gurujegan Murugesan (2023) Gender and allocutivity, in *Proceedings of (Formal) Approaches to South Asian Languages 12*.
- Haddican, Bill (2018) The syntax of Basque allocutive clitics, *Glossa: a journal of general linguistics* 3(1).
- Hasegawa, Nobuko (2017) Honorifics, *The Wiley Blackwell Companion to Syntax, Second Edition*, 1–51.
- Ikawa, Shiori (2022) On Agree Feeding Interpretation: Honorification Empathy, and Switch reference, Ph.D. dissertation, Rutgers University.
- Ikawa, Shiori and Akitaka Yamada (2022) Territory feature and a distributed-morphology approach to clause periphery, in *Japanese/Korean linguistics* 29, 319–328.
- Kashyap, Abhishek Kumar (2012) The pragmatic principles of agreement in Bajjika verbs, *Journal of Pragmatics* 44, 1868–1887.
- Kaur, Gurmeet (2017) Variation in subject-triggered clitic restrictions: A case of Punjabi, in Erlewine, Michael ed. *Proceedings of Glow in Asia XI*, 111–126, Cambridge, MA: MIT Working Papers in Linguistics.
- (2020a) Allocutivity as the locus of imperative syntax, in Baird, Maggie and Jonathan Pesetsky eds. *Proceedings of the 49th North East Linguistics Society* 2, 165–174, Amherst, MA: GLSA publication.
- (2020b) On the syntax of addressee in imperatives: insights from allocutivity, *Glossa: a journal of general linguistics* 5(1), 1–44.
- (2020c) On the syntax of addressee in imperatives: insights from allocutivity, *Glossa* 5(1), 107, 1–44.
- Kaur, Gurmeet and Akitaka Yamada (2019) Embedded allocutivity and its reference, Talk at the Workshop on Person and Perspective, University of Southern California, Los Angeles.
- (2022) Honorific (mis)matches in allocutive languages with a focus on Japanese, *Glossa: a journal of general linguistics* 7(1), 1–38.
- Maeda, Masako, Shiori Ikawa, Akitaka Yamada, and Yoichi Miyamoto (2023) Copular short answers and speech-act phrase in Japanese, Oral Presentation at the 25th Seoul International Conference on Generative Grammar.
- McFadden, Thomas (2017) The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil, Ms., Leibniz Zentrum Allgemeine Sprachwissenschaft, Berlin.
- (2020) The morphosyntax of allocutive agreement in Tamil, in Smith, Peter W., Johannes Mursell, and Katharina Hartmann eds. *Agree to agree: agreement in the minimalist programme*, 391–424, Berlin: Language Science Press.
- Miyagawa, Shigeru (2012) Agreements that occur mainly in the main clause, in Aelbrecht, Lobke, Liliane Haegeman, and Rachel Nye eds. *Main clause phenomena: New horizons*, 79–112, Amsterdam: John Benjamins.
- (2017) *Agreement beyond phi*, Cambridge, MA: MIT Press.
- (2022) *Syntax in the treetops*, Cambridge, MA: MIT Press.
- Okell, John and Anna Allott (2001) *Burmese/Myanmar Dictionary of Grammatical Forms*, Richmond: Curzon.
- Oshima, David Y. (to appear) The Japanese verb *itasu* ‘do’ and its kin: Dishonorifics (*kenjō* II) vs. courtesy honorifics (*teichō*), in *Japanese/Korean Linguistics* 30.
- Oyharçabal, Bernard (1993) Verb agreement with nonarguments: On allocutive agreement, in de Urbina, Jon Ortiz and José Hualde eds. *Generative Studies in Basque Linguistics*, 89–114, Amsterdam: John Benjamins.
- Portner, Paul, Miok Pak, and Raffaella Zanuttini (2019) The speaker-addressee relation at the syntax-semantics interface, *Language* 95(1), 1–36.
- Romeo, Nicoletta (2008) *Aspect in Burmese: Meaning and function*, Amsterdam: John Benjamins.
- Ross, John Robert (1969) Auxiliaries as main verbs, *Studies in Philosophical Linguistics* 1, 77–102.

- Shibatani, Masayoshi (1998) Honorifics, in Mey, Jacob L. ed. *Concise encyclopedia of pragmatics*, 2nd edition, 341–350, Amsterdam: Elsevier.
- Tagashira, Yoshiko (1973) Polite forms in Japanese, in *You take the high node and I'll take the low node. Papers from the comparative syntax festival. The differences between main and subordinate clauses*, 121–134, Chicago: Chicago Linguistic Society.
- Tomioka, Satoshi and Keita Ishii (2022) Being polite and subordinate: morphosyntax determines the embeddability of utterance honorifics in Japanese, *Glossa: a journal of general linguistics* 44(1), 1–37.
- Traugott, Elizabeth Closs and Richard B. Dasher (2002) *Regularity in Semantic Change*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Wang, Ruoan (2023) Honorifics without [HON], *Natural Language & Linguistic Theory* 41, 1287–1347.
- Yamada, Akitaka (2019a) An OT-driven dynamic pragmatics: high-applicatives, subject-honorific markers and imperatives in Japanese, in *New Frontiers in artificial intelligence: JSAI-isAI International Workshops, JURISIN, AL-Biz, LENLS, Kansei-AI Yokohama, Japan, November 10-12, 2019 revised selected papers.*, 354–369.
- (2019b) A Quantitative Approach to Addressee-Honorific Markers: Identification of Crucial Independent Variables and Prototypes, *Mathematical Linguistics* 32(3), 117–132.
- (2019c) The syntax, semantics and pragmatics of Japanese addressee-honorific markers, Ph.D. dissertation, Georgetown University, Washington DC.
- (2022a) A Distributed Morphology approach to Japanese phrase-final particles, in *Proceedings of the 52th Annual Meeting of the North East Linguistic Society*.
- (2022b) Subject-honorific markings in imperatives: an OT-driven Dynamic Pragmatics, in *Proceedings of the 164th Meeting of the Linguistic Society of Japan*, 163–169.
- (2023a) Historical Pragmatics using State-Space Models, in *Proceedings of the 24th Conference of the Pragmatics Society of Japan*, 226–233.
- (2023b) Honorificity, in *The Wiley Blackwell Companion to Morphology*.
- (2023c) Looking for default vocabulary insertion rules: Diachronic morphosyntax of the Japanese addressee-honorification system, *Glossa: a journal of general linguistics* 8(1), 1–47.
- Yamada, Akitaka and Lucia Donatelli (2021) A persona-based analysis of politeness in Japanese and Spanish, in *New Frontiers in Artificial Intelligence, JSAI-isAI 2020 Workshops, JURISIN, LENLS 2020 Workshops, Virtual Event, November 15–17, 2020, Revised Selected Papers*, 129–144, Cham: Springer.
- Yamaguchi, Toshiko (2015) The historical development of *saburafu*, *Yearbook of the German Cognitive Linguistics Association* 3, 71–87.
- Yim, Changguk and Yoshihito Dobashi (2016) A prosodic account of -yo attachment in Korean, *Journal of East Asian Linguistics* 25(3), 213–241.
- Yun, Sung Kyu (1993) Honorific agreement, Ph.D. dissertation, University of Hawaii, Honolulu.
- アントノフ・アントン (2016) 「琉球諸語のアロキュティブティー」 田窪行則・ホイットマン・ジョン・平子達也 (編) 『琉球諸語と古代日本語: 日琉祖語の再建にむけて』, 235–257 くろしお出版, 東京.
- 荻野綱男 (2022) 『敬語の事典』 朝倉書店, 東京.
- 菊地康人 (1994) 『敬語』 角川書店.
- 宮地幸一 (1980) 『ます源流考』 桜楓社, 東京.
- 金水敏 (2005) 「日本語敬語の文法化と意味変化」 『日本語の研究』 1(3), 18–31.
- 坂野永理 (2012) 「コーパスを使った述語否定形「ません」と「ないです」の使用実態調査」 『留学生教育』 17, 133–140.
- 山田彬堯 (2023a) 「「です」の分類: Elsewhere formとしての丁寧語」 『言語文化共同研究プロジェクト「自然言語への理論的アプローチ」』, 59–68.
- (2023b) 「日本語の否定過去丁寧形における方言間のバリエーション」 『計量国語学会第 67 回大会発表予稿集』, 65–72.
- 重野裕美 (2010) 「奄美諸島方言の敬語法: 敬語形式の分布と展開に着目して」 『国文学巧』 208, 1–18.
- 小川芳樹・石崎保明・青木博史 (2020) 『文法化・語彙化・構文化』 開拓社, 東京.
- 川口良 (2014) 『丁寧体否定形のバリエーションに関する研究』 くろしお出版, 東京.
- 大堀壽夫 (2005) 「日本語の文法化研究に当たって」 『日本語の研究』 (3), 1–17.
- 田野村忠温 (1994) 「丁寧体の述語否定形の選択に関する計量的調査: 「～ません」と「～ないです」」 『大阪外国語大学論集』 11, 51–66.
- 尾崎奈津 (2004) 「否定の丁寧形「ナイデス」と「マセン」について」 『岡山大学言語学論叢』 11, 29–42.
- 福島悦子・上原聡 (2003) 「日本語の丁寧体否定辞二形式に関する通時的研究: テキスト分析によるケーススタディ」 『東北大学大学院国際文化研究科論集』 11, 79–89.
- 落合智子 (2012) 「書きことばに現れる「ません」と「ないです」」 『国文目白』 51, 14–22.